

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

ソードアート・オンライン 小さな勇者

### 【作者名】

古塩

### 【あらすじ】

女神様によって転生させられた世界ソードアート・オンライン

主人公 冬樹 優は一人でも多く人を助けるために行動する

キャラ名 y u k i

初めて小説を書くのでアドバイスもらえたら嬉しいです

## プロローグ

僕は死んだらしい。どうやら目の前にいる女神様の原因で死んだと言われた

へー・・・で？僕はどくなるのですか？女神様

「お詫びの代わりに小説の世界に転生させてあげます」

僕あんまり小説とか見ないからどこに行けばいいのでしょうか？

「それじゃー3つの中から選んでください」

分かりました

「インフィニット・ストラトスとソードアート・オンラインとアクセルワールドです、この中から選んでくださいな」

ふむ、面白そうな方を選ぶかな・・・ここに行こうかな。

「女神様・僕はソードアート・オンラインの世界に行きます」

「それじゃーお詫びとして2つまで能力を付けられますがどうしますか？」

「考えるのめんどくさいので女神様の方で勝手に決めていいですよ？」

「それではあっちに行っても困らない物を適当に付けておきますね」

あと前世の記憶とか小説の知識とか容姿についてはどうなるのですか？

「前世の記憶は消します、小説の知識はある程度付けておきます、容姿の方は私の好みにしておくので気にしないでください」

「俺の容姿は女神様の好みになるのですか？」

「はい。私はかわいい系が好みなので期待してくださいね？」

いや、別にあなたの好みなんてどうでも」

「それでは、頑張ってくださいね」

ちよつとまっせ

僕の立っていた場所に穴が開いて・・・落ちる

女神様のばかああああああああ

## 人物設定

### 人物説明

SAO事件発生時 13歳 クリア時15歳

名前 冬樹 優 SAOキャラ名「Yuki」

身長 148cm 体重 ?

容姿 女神様の仕様により男性なのに女の子によく間違えられるほどの女顔

アスナにキリトを足して割った感じ

体は女の子のように細く筋肉がない感じ

父親と母親については女神が不要と判断して存在していない様  
ハーフとなっている

髪の色は白 目は蒼である 髪型はキリトと同じ

キリトとの関係は直葉と行っていた剣道所で知り合った、

キリトが剣道をやめたあとは直葉と遊ぶ為に家で会って挨拶する  
程度の仲

優は剣道で中学1年生で全国大会で優勝する程のもの

直葉との関係は一樣同級生となっているが学校の奴らには秘密で

実は付き合っている

SAOでの設定

SAOでは敏捷値を一極振りしているダガー使い、片手剣を使っているうちに出るといふ刀系を知るまではダガーのみ

SAOでのキリトとの関係はフレンドでボス攻略時に会う程度

第1層の時はエギルと組んで参加、第2層からフロアボス攻略でリーダーを務めている

初期のスキル設定は短剣と策敵スキルに振っている

エギルとはもうすでに死んで居ない母親の親戚となっている

良く Dicey Cafe に行っている設定 SAOを手に入れたのもエギル経由にしてある

## 第1話

みなさんこんにちは、冬樹 優です。女神様に会って転生した後

携帯に女神様からかかってきているいろいろの説明された、この世界の僕と桐ヶ谷 和人の家が隣同士であることや

直葉と一緒に中学校に一緒に行ってる事や中1で剣道で全国優勝していたこと直葉とは幼馴染で密かに付き合っていることにされていた。

もちろん直葉とのいちゃいちゃした時の記憶も付けられている

現在はSAOの事件が起こる1日前らしいと女神様に言われた

ねー？女神様、ところで2つの能力は何にしてくれたんですか？

「1つ目は瞬間暗記で、2つ目は 不可視の隠蔽です」

「1つ目は良いとして、2つ目は何ですか？隠蔽とはどう違うんですか？」

「SAOの世界で死なない為に付けました隠蔽とは違い使用してれば100%見つけることができません」

へー便利だな

「まあ、とりあえず伝える事は伝えたのであとは頑張ってください」

「はい、分かりましたそれじゃー」

とりあえず明日までまで何するかな、「っちじゃ普通に中学1年生でしたっけ？」

「制服に着替えて学校に行きますか・・・部活があるしね」

出かけようとしたら玄関先にこの世界の僕の彼女でもある桐ヶ谷直葉が立っていた

「優君おそいよ、部活遅れるから早く行くっ？」

「ああ、ごめんちょっと考え事してて遅れたよ」

直葉とは幼馴染でもあって昔からほとんど一緒に行動している。

「そつだ、全国優勝おめでとう優君」

「ああ、ありがとうっね直葉」

「でもすごいよね、1年生で優勝しちゃうんだからさこれは昔から鍛えている私のおかげかな？」

「まあ、今となっては僕の方が強いんだけどね」

「こんな会話をしているうちに学校について今日も部活を一生懸命やる」

うちの学校は男子も女子も一緒になって部活をしている

僕がこんな容姿であるのと同時に勉強も学年1位(女神仕様)だから女子からの視線が痛い程集まる

部活が終わり帰ろうとしたら直葉がやって来てもうすぐテストがあるから勉強を教えてほしいと言われた

「そつだ場所はどつするの？僕の家に来る？それとも直葉の家？」

「うーん、優君の家だと誰もいないから怖いんだよね襲われそつで」

直葉はからかつよつな顔で言つた

「ひどいな直葉、僕はそんなに女に飢えてないよ？」

「まあそれはおいて置いて、私の部屋でいいよ」

「それじゃー後で行くね」

「うん、またあとでね」

とりあえず、シャワーを浴びて髪を乾かして適当に勉強道具をバツクに入れて飲み物とお菓子ぐらいは

持つて行くいくかな、分かれてから1時間は経つていたが直葉の家は僕の家の隣だからすぐに行ける

桐ヶ谷家の玄関に着きチャイムを鳴らす・・・  
出てきたのは直葉ではなく兄の和人の方だつた

Side 桐ヶ谷和人

よし明日はSAOの正式サービス開始だ。明日の為にとりあえず



テストの時の情報を自分なりにまとめて

次は国内最大のVRMMORPG情報サイト M M O トウモロー  
のチェックを済ます

そして昼飯を食べようとしたら玄関のチャイムが鳴ったので玄関  
に行く

宅急便かと思ったがそこにいたのは直葉と付き合っている冬樹  
優だった

「やあ久しぶりだね優。そういえば剣道で優勝したんだって？」

「ホント久しぶりですね和人さん、剣道は先週優勝してきましたよ」

「ところで今日はどうしたんだ？」

「直葉ちゃんが勉強を教えてくれと言われて、勉強会です」

「そうなのか、直葉は自分の部屋にいると思うから」

「はい、おじゃましますね」

そして優は二階の直葉の部屋に行く、あいつとは昔の剣道所で一緒  
にしていた時に気づいたが

かなりゲームすぎだったな、今度SAOに誘ってやるかな？でもあ  
いつお金あるかな？

S i d e 桐ヶ谷 直葉

部活が終わり勉強の約束をした私はとりあえずシャワーを浴びて  
着替えたら軽くごはんを食べ2階に行って

優君を待つ事にした、チャイムが鳴って下に行こうとしたら憂君と  
おにいちゃんが話していたので行くのをやめた

なぜかおにいちゃんが10歳の時ぐらいから拒まれている感じがあつたのだから

「直葉？入ってもいいかな？」

「うん入ってもいいよ」

「おじゃまします」

そして勉強会が始まって3時間が経った。

「ねー優君？」

「何？直葉」

「この間お兄ちゃんがSAOの 版の抽選に応募して当たったんだ。それで私、それがどんな物か知りたいんだけど

優君は知ってる？」

「お兄さん凄いね 版の奴抽選で1000名の奴だよ？別に話すのは良いけど全部話すと長くなるからそれでもいいの？」

「うん」

優君がSAOについてやその他いろいろな事について教えてくれた

お兄ちゃんはそんな世界にいるのかと私は興味を持った事は言うまでもない

「ねー優君はなんでそんなに詳しいの？」

「僕もSAOを持っているからだよって言っても正式版の奴だからまだSAOの世界には行ったことないんだ」

「へーそれいつサービス開始するの？良かったら私にも貸してくれない？」

「貸すぐらいは別にいいよ、正式サービス開始は明日の13時だよ」

直葉には悪いけど貸せないんだよな・・・ごめんな

それから1時間ほど勉強をしてお開きになった

## 第2話

二〇二二年十一月六日、午前九時 日曜日

Side 冬樹 優

今日はSAOの事件が起こる日だ。今日は部活を休むことにした  
その時携帯がなった……え〜と誰かな？アンドリュー・ギルバー

ト・ミルズ

ああエギルさんか

「はいはい、朝早くからどうしました？エギルさん」

「お前はあいからわず女のような声だな」

しょうがないじゃないか女神様の好みなんだから

「で？なにか御用ですかエギルさん」

「今日は部活も休みにして時間作るから2人で狩に行くって言ったろ  
？それから

俺の友人に テスターが居てなそいつから情報をもらってるから  
あっちに行ったらお前を連れよう」と

思っで連絡したんだよ」

僕としてはうれしいな原作の知識はあっても武器やモンスターの  
知識とかあんまりないからな

それにエギルさんと一緒に居ればボス攻略に誘われるって事じゃ  
ないか

「そうなんですか、いいですよこっちは初心者ですから嬉しい話ですよ」

「それじゃー13時にあつちで待ってるからな」

「ええ、それじゃー」

さてと直葉が居れば僕がプレイしている事もしってるし玄関の鍵を開けば発見してくれるから

問題はないし、万全の状態のできるように風呂とトイレは済ますか直葉にはシヨックを与えてしまっけど僕は一人でも多くの人を助けなくちゃいけないしな・・・

いろいろ考えつつ他の事も済ませ13時の5分前にベットに横になり準備する

5・4・3・2・1・0

「リンク・スタート」

そして僕はあの世界に行く・・・

Side 桐ヶ谷 直葉

優がSAOを始めた頃直葉は

さてと、SAOは優君から借りられるから今は我慢して剣道に集中しよう

そして部活が終わった5時ごろに家に帰ったら何時ものように牛乳を飲みつつテレビを付けた

そのニュースを知った直葉はそれが嘘だと信じたかった

そう直葉自体が知っているオンラインゲームソードアート・オンラインでの

被害者が今の時点で184名出ているというニュースだった……

「嘘だよな？そんな……お兄ちゃん……」

確認したくなかったけど……直葉は久しぶりに入る。和人の部屋のベットでナーヴギアを付けて寝ている  
和人がそこにはいた

「いやだよ、起きてよお兄ちゃん……」

直葉はこの事をすぐに母親である桐ヶ谷 翠に連絡した、そしたら前日に和人と話していた

翠は会社を抜けて自宅に向かっているというそして救急車も呼んだことを直葉に伝えた

直葉は信じたくない事に気がついた、自分の恋人であり隣に住んでいる冬樹 優の事を

翠が家に帰ると同時に救急車だけではなく警察まで来ていたそこで翠に

となりの自分の大切な人も同じゲームをしているということ  
冬樹家は玄関に鍵がかかってなかった、直葉は自分の恋人である優の部屋に行ったが

そこには見たくないものがあった。自分の兄と同じものを付けていたのだ

「優君、嘘でしょ？今度貸してくれるっていったじゃん、戻ってこないなんて嘘でしょ？」

ベットに横になっっている優の体に寄りかかって泣いていたら、関係者が翠の話を聞いて

入ってきた。そして今の現状では自分達ではどうしようもできないということを知ることがされた。

## 第3話

二〇二二年十一月六日 十三時 日曜日

Side 冬樹 優

最初に自分のアバター作成からか・・・どうせ今日で消えるんだからこのミラーって

奴で自分そっくりのアバターでいいか、さてとエギルさん探さなきゃな

そしてアバターも決定してあとはプレイヤー名？うーん和人さんも自分の名前と名字に

かけてるから僕もそうするか、うーん

「決めた、yukkiにしよう」

そして決定を押しした。さてとエギルさんが待ってることだし

そしてyukkiの視界が一度光、消えたと思ったらSAOの始まりの町と言われる  
とここにいた

「おおお、想像以上にリアルですね感激です」

この世界に来たのも初めてだから気持ちが高まるのはしょうがないか  
そんな僕の様子を見て近くに居た人が笑った。

「っふ、よう久しぶりだな優」



「っおエギルさんですか？てかこの呼び方合ってるのかな？」

「お前の予想どおり俺の名前はEggyだがな、お前はどつなんだ？」

「僕の名前はYurukiですよ、名前と名字をかけたんですよ」

そして僕達はお互いに笑い合う

「よし、まずはフレンドになってパーティー組むか」

「そうですね、そういえば テスターの人はどうしたんですか？」

僕がそういつとエギルさんは苦笑いをした

「ああ、あいつは人と関わるのが苦手な情報屋なんだけど、フレンド  
メッセージで

聞きたいことが送られてきたから心配するなよ？」

「まあ別に僕はどつでもいいんですけどね」

その後は二人で始まりの町周辺の雑魚モンスターを狩っていたそ  
して二人で装備等をあらためて買っていた

スキル設定は僕は女神様のくれた不可視の隠蔽があるから隠蔽を  
付ける必要はないし。

とりあえずは短剣と策敵にスキルスロットを使った。

さつき防具屋で売っていた黒のローブを装備してエギルさんが大  
き目の斧を装備していたが

あなたのSTRでそれ使えるのかと疑問に思ったが、エギルさんは  
STRとVITにレベルアップのステータスを振っていて

大丈夫らしい。

「お前本当、剣とかのセンスあるけど何で短剣なんだ？お前は剣道してるから両手剣とかにすると思っただがな」

「そうですね？僕も刀とか使いたいんですけどこの世界には無いみたいなんで短剣が次に好きですからですよ」

そういうながら話していたらいきなり鐘のような音がして僕とエギルさんの体に

鮮やかなブルーの光の柱が包んだのだ。

エギルさんが驚いていたがすぐに景色が変わった。

そこは始まりの町の中央広場だった。

## 第4話

運営側の強制移動ではじまりの町にテレポートされた

僕やエギルさんと同じようにここに強制移動されたプレイヤー達  
でいっぱいになっていた

多分今現在ログインしているプレイヤー達全員なんだろう、その数  
は約1万つてところかな

S i d e    エギル

いきなりテレポートされたと思ったたらなんなんだ？これは

「なあ    y u k i、何で俺達はここに飛ばされたんだ？」

「それは多分さっきからログアウトできないようになってる事につい  
ての説明なんじゃないですか？」

え？優お前今なんて言った？    ログアウトできない？ふざけてる  
だろこんな問題は今後の運営に  
関わるぐらいのことなんだぞ？

「まあエギルさんそのうちGMが出て説明してくれますよ」

「ああ、そうだな」

次第に苛立ちの色合いを増し、「ふざけんな」「早く帰せ」等の喚き

声も発散し始めた

とその時誰かが「上を見ると言った」

Warning , System Announcement  
と読める、ようやくアナウンスがあるのかと思ったら

身長二十メートルはあるつかという、真紅のフードをまとった巨大な男だった

その直後 良く通る男の声が聞こえた

「プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ」

「私の名前は茅場晶彦、今やこの世界をコントロールできる優一の間だ」

茅場が言うにはこのゲームをクリアするには第100層をクリアすれば良いということ

外部によるナーヴギアの停止、破壊されないことそしてなによりこの世界でHPがゼロになった

瞬間ナーヴギアによってプレイヤーの脳が破壊されるといことだった、今現在208名の人がナーヴギアによって死んだことを伝えられた。

茅場からのプレゼントである手鏡これはSAOのアバターがリアルの自分と同じ姿になるとい物だった

ユウキと俺は初めからミラーを選択したためあまり変わっていない

い

そして茅場は言った、以上でSAO正式サービスのチュートリアルを終了する諸君の健闘を祈る

今日この日から俺達はプレイヤーから囚人になった

そして広場は無数の叫び声が悲鳴。怒号。絶望。罵声。懇願。そして咆哮

その中俺はとうとうどうも対応していいか分からないでいた。

俺とYukiは広場から抜けNPCが営業しているところに入った

「なあ、ユウキ 俺達これからどうすればいいんだ？俺にはかみさんだっているんだぞ、店だってこれからうまくやるつもりがこんなことになるんて・・・」

俺は自分の不甲斐なさに泣いていた

「とりあえず、そのうち第1層のボス攻略が始まると思いますそれまでにボスに勝てるように」

装備やレベル上げをしましょ」

「そうだな、っふお前は強いんだなこんな状況なのに」

「泣いてたりしても何にも解決にはなりませんからね、前向きに考えましょう」

「これからはどうしますか？二人でやるかソロで行くか」

「ああ、2人で行こうととりあえずはボス攻略までにできることをしよう。テスターの情報屋のアルゴにも協力させるさ」

とりあえず俺とユウキはボス戦まで二人で行くことにした。

そしてゲーム開始1ヶ月で2000人が死んだ。

未だに外部からの救出は無く、死人が増え続ける状態が続いている

Side ユウキ

エギルさんは僅かに抱いていた外部からの救出による事件解除、というのを完全にあきらめ、ひたすら

装備強化やレベリングを行っていた。

そして僕はモンスターのドロップ品のスラッシュダガーを強化し+5までにすることができた。

「エギルさん、どこか良い狩場無いんですか？アルゴさんに聞いてくださいよ」

あの後僕らはアルゴさんと連絡を取ってフレンド登録した、ちなみにエギルさんとアルゴさんが

仲が良くネタの値段を半額にしているらしい。

「ユウキ、もう今の段階じゃ良い狩場なんてもうここさっきの洞窟以外ないぞ？」

今まで僕らは2人で狩りをしていたこともあって今の時点でかなりの高レベルプレイヤーだ。

実際防具とかもかなりお金かけてますしね。ちなみにエギルさんには内緒で女神からもらったスキルを

使って夜の過疎場で狩っていたのは内緒にしています。僕はお金を貯めて最初にかつた黒のローブを売って同じタイプの

紫色のローブを着ていますしその服装の中も軽量系の装備ですが今の段階で高い物を付けてます。

エギルさんに至ってはさらに大きい斧を買っていますし

「さてと、それでエギルさん今度の1層のボス狩りに誘われたって本当ですか？」

「ああ、一様お前を誘いに来ていたんだがなお前が自分の容姿のせいで他の奴になめられるのも

嫌だからわざとメール送ってまで一人になったんだ」

「そうだったんですか、ありがとございませす。でも僕ゲーム始まっ

てからずっとこの

ローブを装備してるので顔は見られてませんけど?」

「いや、フロアボスに参加するから素顔をぐらい知らない信用できないというて

見させてほしいと多分言ってくると思ったんでな」

「とりあえずそのフロアボスの会議いつですか?」

「えっと、明日のPM4時となっているな」

「それまで狩場にでも行きますか?」

「そうするか。でもその前に飯だな」

僕とエギルさんは昼ご飯を食べた後アルゴさんが今の段階でかなりの狩場で5時間ほど狩りをしました

いやーこの狩場結構出てくるモンスターがゴリラ?みたいで敏捷値がかなり高いんですが体力がかなり低いんですよ

そんないい狩場に良く人が来ないだって?それはアルゴさんがかなりの価格で売ってるからですよ

エギルさんにかかれば半額になるんですがね。

ちなみに他のプレイヤーからは僕の事を中学生ぐらいの女性だと思われていたらしいです(アルゴ談)

エギルさんの容姿が完璧に元軍人さんみたいなんで誰も僕のこと誘えないって言うのが本音ですがね。



アルゴさんは僕の事についてもいろいろ情報として売っているらしい(ホントやめてほしいよね)

そして今日はフロアボス攻略会議の日だ

僕とエギルさんはPTなのでほとんど一緒の宿で寝泊りしている

「エギルさん、起きてますか？朝ごはん食べに行きますよ？」

とノックするとドタバタとあせるエギルさん

「わ、悪い寝ぼけてベットから落ちてしまった」

「まあ、別にそんなことはいいから朝ごはん食べに行きますよ？」

「ああ、」

「ご飯を食べた後は僕とエギルさんはアルゴさんに呼ばれて最新版のガイドブックを作ったから持って行くといいわ」

と言われもらったのだがそのかわりに僕達がマッピングした情報と交換されたの言うまでも無い

「さてと、そろそろ攻略会議が始まる4時だから行くか」

「そうですね、それじゃー行きましょー」

そして第一回フロアボス攻略会議が始まった。

四十五人

それがこの広場に集まった人数だった。

僕とエギルさんは一番前の席に座って他のプレイヤーは後ろの方でここにいる人達を見渡していた。

「エギルさん案外少なかったですね」

「ああ、レイドの二つの上限すら満たしていないな」

このゲームでは最大四十八人の連結（レイド）パーティーを作る事が出来る。

死傷者を出したくないのならレイド二つによる交代制が望ましい。

そういえばキリトさんも参加してましたよね原作通りならそう思い辺りのプレイヤーを見ると

確かに離れているところに居ますね和人さん改めキリトさんが

そう思っていたらよく通る叫び声が聞こえました

「はい、それじゃ、そろそろ始めてもらいます」

広場の中央に現れたのは身長の片手剣使いだった。

装備もしっかりしておりなかなかの高レベルそうだったただけではなく

かなりのイケメンだった。

「ねーエギルさん。あれだけのレベルのイケメンの人がこんなゲームなんてするんですか？」

「まあ、いなくはないがかなり少ないと思うぞ？」

「今日はオレの呼びかけに応じてくれてありがとう！ オレはディアベル！ 職業は気持的に《ナイト》やっています！」

そのジョークに場がどつと湧く

すごいですねあのイケメンなのにギャグセンスありと来ましたか

今のでここにいる人達の殆どがディアベルさんに好感を抱いたでしょう。

「……今日、俺達のパーティがボスの部屋を発見した」

挨拶を終えて、ディアベルさんが本題に入る。

その声音は真剣なものだった。

「オレ達は示さなきゃならない。ボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームをいつかきつとクリアできるってことを、

はじまりの街で待ってる皆に伝えなきゃならない。それが今この場所にいるオレ達の義務なんだ！」

はっきり言って、見事な演説だと思った。

ここにいる人達はさっきまでバラバラだった最前線の住人たちを1つに纏めるそのセンスには見張るものがある。

だが、その時。

「 ちょお待ってんか」

そうして一番上の席からディアベルさんの隣に移動する

「わいわ、キバオウっちゅうもんや」

キバオウさんはこう言った

「こん中に、何人がワビ入れなあかん奴がおるはずや」

「ベータ上がり共はこんのクソゲームが始まってからビギナーを見捨てて消えよった。

ウマイ狩場やらボロいクエスト独り占めして、その後もずーっと知らんぷりや。こん中にも

おるはずやで、ベータテスターやっちゅうこと隠してボス攻略に参加しようとする薄汚い連中が。

そいつらに土下座さして貯め込んだ金やアイテムを吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし預かれん！」

キバオウさんは テスターのせいで約2000人もの人死んだからこの場にいる人に土下座してアイテムと金を差し出せと言っただのだ

「あの〜発言いいですか？」

女の子のような声によってこの場にいる全員が僕を見た。

「お前は誰や？」

そう言われたので僕は紫色のロープを取り頭をさげる。

その行為により周りの人が僕のことを見る

「ええと僕の名前はユウキです、それからさっきキバオウさんが言った テスターが初心者を見捨てたから約2000人も人が死んだと言いたいのですよね？」

「そ、そうや」

そして僕は一つのガイドブックを出した

「これなんだか知ってますよね？最初の武器屋で無料配布されてるガイドブックです」

「それなら知ってるで、ワイももろたし」

「このガイドブック作った人知ってますか？元 テスターのアルゴさんっていう人が一人で作ったものなんですよね」

僕のこの発言で広場にいる人達が驚く

「情報は誰でも手に入れられたのですよ、そして今はそれをふまえてどうして行くかってこの攻略会議で左右されると僕は

思っていたのですが、あなたはどうなんですか？キバオウさん」

「う、それは」

そしてキバオウさんの意見は論破されてしまった。

舌打ちをしながら一番前の席にすわる

そして広場にいるみなさんが唾然としているなか、ディアベルさんが僕に

「君をここに呼んで正解だったと思ったよ」

「さてと、まずは仲間や近くに居る人とパーティを組んでみてくれ」

Side キリト

ディアベルがそういつとすでに仲間同士や近くにいい人たちでくんでいた

この場合最悪なのが誰とも組めずにフロアボスに組めないということだ

その時俺からもかなりはなれたところにレイピア使いが居たので声をかけて

「なあ、あんたアブレたのか？」

「アブレてなんかない、周りがお仲間さん同士だったから遠慮したの」

「なら、俺と一緒にPTを組まないか？今回だけの暫定だ、このまま組めないとフロアボス自体挑戦できなくなる」

「いいわ」

そして俺はPT申請を送り相手がおk押すと俺のHPゲージの下に小さくAsunaと出た

## 第5話

訂正第1層の参加者は26人とします

Side ユウキ

ディアベルさんがPTを組んでくれと言われて数分後。この場にいる人達でPTが出来ていた

キリトさん達は原作通りに2人組みだった。

「さて、PTが出来た所で役割を説明しよう」

ディアベルさんがそう言うと皆が彼に視線を集めた。

「例のガイドブックによると、ボスの名前はILLFang(イルファング) tha(ザ) Kobold(コボルド) Lord(ロード)。それと、RuIn(ルイン) Kobold(コボルド) Sentinel(センチネル)という取り巻きがいる。ボスの武器は斧とバックラー、

四段あるHPバーの最後の一段がレッドゾーンに入ると曲刀カテゴリーのタルワールに武器を持ち替え、攻撃パターンも変わる、という事だ」

「現在、六人PTを組んでもらいるがこの場には26人だ、3つのPTがボスを攻撃する

そして人数があぶれて限界数に達していないPTと、もう1組の少数のPTが取り巻きの相手を

してもらおう、この仕事はかなり大事なので気合を入れてやってくれ」



「あぶれてしまったパーティーだが・・・」

キリトが手を上げる。他のみんなが頷く。

「よし、任せたぞ。最後にアイテム分配についてだが、金は全員で自動均等割り。経験値はモンスター

を倒したパーティーの、アイテムはゲットした物とする。何か質問や異論は無いかな？」

ディアベルさんの説明にプレイヤー達は近くの人達やPT同士で話しているが異論は全く出てこない、

アイテムや経験値に目を取られて突出してしまふPTが出るかもしれないが、恨みっこなしというのが

争いを生むことなくすむためによく使用される。

「無いようだな。それでは明日の朝十時に出発する、では、解散」

ディアベルさんが手を叩いた事で第1層フロアボスの作戦会議は終了した。

他のプレイヤー達は話し合う者もいたり、さっさとその場から離れる者達がいる

僕らのPTはエギルさんキバオウさんディアベルとディアベルさんのフレンド2人で構成された

僕とエギルさんが話し合おうとディアベルさんの所へ行くとキバオウさんも来た

「ディアベルさんさっきはすいませんでした、出すぎた真似をしてしまってます」

「いや、気にしてないよ僕も君と同じ考えさ」

そついうとキバオウさんが申し訳なさそつな顔でさっき言ったこと事を許してくれと言ってきた。

「いえ、キバオウさんが言いたいことも僕達正式版のプレイヤーからしてみれば

誰でも一度は思っていることですし、ボス戦ではPTなんですから気にしなくてもいいですよ」

キバオウさんに僕がそついうとキバオウさんがエギルさんの顔を見てから

「そう思えばユウキはんは女の子なんか？」

何を言ってるんだこの人は僕は背が低く小さくて女の子っぽいだけで男なのに

「え？僕は男ですよキバオウさん」

それを聞いたエギルさん以外の方が驚いていた。  
ディアベルさんが言った。

「そうだったのか俺はずっと君がエギルさんと二人で組んでいる高レベルの女プレイヤーだと思っていたよ。

でも2人でそれだけの装備やレベリングにするのにかなり時間が掛かったんじゃないか？」

「ええ、エギルさんの知り合いに例のガイドブック作成者の元　テスターの情報屋が友達でいて

格安で情報提供してもらってるからこれだけの装備やレベルに上げることができたんですよ」

そんな会話をしながら僕達のPTはご飯を食べ、明日に備えるなめに早めに寝た。

女神様に貰った能力を使い僕は3時間ほどモンスターを狩っていたが、それは誰も知るよしも無い

朝十時の会議が行われた場所で集まり、人数確認し終わると僕は、迷宮区塔の一番上へと向かった。

そしてボスの部屋に辿り着くとPT同士での役割を話ディアベルさんが扉の前で剣を地面に突き立てると

「聞いてくれ、みんな。俺から言うことはたった1つだ」

そして、ディアベルさんが右手を前に出してぐっ握ると

「勝つしぜ！」

そう言つと僕達はみんなで頷いた

「行くぞ」

ディアベルさんがそういつと扉を開ける

Side キリト

部屋の中はかなり広がった。そして、奥の方に玉座が見え、

その玉座には何かが座っていた。その横には巨大な斧が見えた。

開いた扉をディアベルと、それに続いて何人が入った時

部屋の中が一気に明るくなった。

その途端、玉座に座っていた奴が斧を構えながらジャンプし

玉座から少し離れた位置へと着地し、大きな叫び声を上げた。

オレはベータの時に一度見た事があるが、巨大な赤い体、腹には何かの

紋章があり、腰には斧とは違う武器を携えている。

そしてボスの頭の上に文字が現れた

【I L l f a n n g t h e K o b b o l d L o r d】

イルファング・ザ・コボルトロード、こいつが第1層のフロアボスだった。

そして、ボスが吼えるのと同時にボスの付近にモンスターが4体現れた

そいつらの頭の上にも文字が現れた

【RuIn Kobbold Sentinel】

ルイン・コボルト・センチネル・・・鎧を着た小さなコボルトだ

その手には鈍器のような物を持っている

それと同時にディアベルさんが叫んだ

「攻撃、開始!!」

一斉にPTのほとんどが突っ込んで行った

キバオウとエギルがとりまきの一体と激突した

そして他のメンバーもとりまきとボスを攻撃する

ディアベルの指示が飛ぶ

「A隊、C隊、スイッチ」

そついうとボスが攻撃の構えを見せた。

「来るぞ、B隊ブロック」

キバオウとエギルがソードスキルと使い攻撃をはじき返す

「C隊、ガードしつつ、スイッチの準備・・・いまだ!!」

そういつと、プレイヤー達がボスに向かってソードスキルを使い攻撃する

「後退しつつ、側面を突く用意！D・E・F隊、センチネルを近づけるな！」

そういつとキリトとがセンチネルに向かってソードスキルを撃つ

1体のセンチネルが吹き飛ぶとそれに合わせキリトが叫ぶ

「スイッチ」

そういつとアスナが細剣で目にもとまらない速さでセンチネルに連続攻撃を与えた。

「グッジョブ」

思わず、俺は言った。

そしてボスの4段あるHPバーが一番最後が赤くなるのと同時に

右手の斧とバックラーを捨てた

「情報通りみたいやなあ」

キバオウ小さく言った

その時、

「下がれ！俺が出る」

ディアベルさんがそういつと全員の横を武器を構えながら通り抜けた。

キリトは思った、ここはパーティ全員で包囲しつつ攻撃するのがセオリーのはずだと

なぜ・・・

と、その時こちらを見てディアベルが口元を少しだけ笑みが浮かんだのが見えた同時に

キリトは気づいた、ディアベルさんが集団の前に出ると右手に持った片手剣をが光を放つ

それと同時にボスは腰にあった武器の柄をつかみ抜いた。

それは、恐ろしく大きい「太刀」だった。

あれは、曲刀のタルワールではなく・・・野立刀!!

の時と違う

「ダメだ！全力で後ろに飛べー!!」

オレは思わず、ディアベルに向かって叫んだが、すでにディアベル

は

ボスに向かって走っていた。

その時、ボスは武器を構えて高くジャンプした。

そして部屋の柱の一部に着くと、柱から柱へと高速ジャンプで動き回った

そして、油断したディアベルの上から重たい一撃を浴びせた。

「うあああああー！」

と叫びながら飛ぶディアベルだったがボスが追撃しようとした時、優が短剣で初期のソードスキルを

使い連続でボスに攻撃する。

ディアベルは集団の上を飛び越えて地面に叩きつけられた。

「ディアベルはん!!」

キバオウがそう叫ぶと、ボスに攻撃していた紫色のロープを纏っているリアルでの知り合いである

優に吼える。

俺はディアベルの方へと向かった

「ディアベルー!!」

キリトはいち早く、ディアベルの所に行くと上体を起こして声を上げた



ディアベルのHPバーはすでにイエローゾーンに入っており  
すさまじい速度で減少している

「なんで、あんな無茶なことを」

俺が近くに座りポーチからHP回復ポーションを取り出し  
ディアベルに飲ませた

「やはり・・・お前も・・・ テスターだったのか・・・お前なら分かるだろ  
」？」

その一言に思わず戸惑ったが、返事をした。

「やはり、ラストアタックボーナス狙いだったのか、お前も 上がり  
だったのか」

「頼む・・・ボスを倒してくれ・・・みんなの・・・ために・・・」

その声と同時にディアベルは気絶した。SAOの中でもストレス  
やモンスターの攻撃による衝撃により  
気絶をするプレイヤーは少なくないのだ。

そんな様子を見ていたキバオウとPTの数名がディアベルの近く  
にきてボスから守ると言ってくれた

ディアベルの言っていた言葉を思い出しながら考えていた。

このゲームが始まった時、俺は自分が生き残る事しか考えてい  
なかったのだ

だが、ディアベルは テスターでありながら他のプレイヤーの見捨

てなかった、

そして見事にみんなを率いて戦っていた、俺が出来なかった事をディアベルがやっていたのだ

俺は恐怖という感情に負け、自分が助かる事しか考えていなかった。

そんな自分が、今更ながら、馬鹿らしくなっていた。そして俺は剣を持ち、立ち上がった。

それと同時にアスナが言った

「私も」

オレはそれを聞くのと同時に声を上げていた

「頼む」

オレはアスナにそう言うと、同時に剣を構えて走り出した。

「手順はセンチネルと同じだ!!」

それを聞くとアスナは小さく

「わかった」

先程のディアベルの事もありボスへの恐怖心が芽生えてしまった者達がほとんどで

ボスへ攻撃しているのは優だけだった。走りながら会話をしてボスへと行く間に短剣で

ガードしていたが、かなりの距離を吹き飛ばされてしまっていた。

オレ達が突っ込んでくると、赤い目をキラリと光らせ野太刀を腰に構え、ソードスキルを発動させた。

俺はソードスキルを発動してボスの攻撃を跳ね返すと同時に叫ぶ

「スイッチ!!」

それと同時に俺が叫ぶとアスナが突っ込んだ

そして細剣で斬りかかろうとしたらボスのお目がカツと開かれた・・・

その直後ボスの野太刀が赤いラインを引きながら

アスナへと向かった、俺は同時に叫んでいた

「アスナ!!」

アスナはソードスキルを発動していなかったため体をそらせたが、きていたコートが切り裂かれてしまった。

現れたのは、栗色の長い髪の毛で顔は小さくたまご型の整った顔で世間で言う美少女というものだろう

だが、アスナは体制を立て直し即座に細剣のソードスキルでボスに連続攻撃を与えた

ボスのHPがちょっとずつ減っていくが、まだ、まだだ。

「次来るぞ!!」

一瞬、アスナの姿に見とれていた俺は声を上げ、突っ込む

そして俺がソードスキルを発動してボスの攻撃を跳ね返すと同時にそれを利用して

そのまま体を回してキリトの腹へボスのソードスキルが直撃した。

「がは!!」

声を上げて、俺の体は吹っ飛び、後ろにいたアスナも一緒に吹っ飛び地面に叩けつけられるのと

同時に俺の剣が手から離れた。急いでHPバーを確認するとイェローゾーンの手前で止まっていた

ボスがその隙に協力なソードスキルを発動して俺達に叩き込もうとしていた。

それをアスナは細剣を構えて受け止めようとする

「おらあ!!」

という声と共に俺達のすぐ上を緑色のラインが切り裂き、ボスの一撃を弾き返した

見ると大型の男、エギルが斧を振り抜いた状態で立っていた。俺達に向かって

「回復するまで、オレ達が支えるぜ!!」

そう言うとエギルの後ろから続々とプレイヤーが4人ほど走り抜け、ボスの元へ行く

エギルもすぐにそれに続く。ボスに攻撃を加えるが、ボスは野太刀で防ぎ、5人を全員を吹き飛ばした。

その直後、ディアベルの時のように大きくジャンプし、ソードスキルを発動した。

「危ない!!」

そう叫ぶと、すぐさま俺もソードスキルと発動して空中にいるボスに向かってソードスキルを

ボスの腹に叩き込む。ボスが体制を崩して倒れる。

そして俺は走りながらアスナに向かって叫ぶ

「アスナ!!、最後の攻撃頼む!!」

「了解」

アスナが返事をする。オレとアスナはボスの元に向かい込む。

「はああああああ!!」

と叫びながら近づき、立ち上がったボスにソードスキルを放つ

ボスが体制を崩した所にアスナがソードスキルを放ち、ひるんだところ、オレが切り裂いた

ボスのHPバーが数ドットの位置まで来ると俺はボスの腹から顔にソードスキルを叩き込む

「はああああああ!!!」

そして俺は下からボスの顔に向かって斜めに切り裂いた。

ボスにはオレが叩き込んだラインを残したまま宙へ飛び

ボスの体が輝くと、空中で無数のポリゴンをまき散らしながら消滅した。

そして一瞬の沈黙、その直後

「!!!! やったあああああああ!!!!」

とフロアボスに参加した全員が叫んだ、空中には「C o n g r a t  
u l a t i o n」という文字が浮かぶ

その直後視界のシステムメッセージが表示された「Y o u g o t  
t h e l a s t a t t a c k i n g b o n u s」

ボスに最後に一撃を与えた者に贈られるラストアタックボーナス  
のメッセージ

そして確認ボタンを押すと「ソード・オブ・ミッドナイト」

直訳すると真夜中の剣か

そう思ってたなら、すぐ横から声をかけられた

「お疲れ様」

顔を見るとアスナだった。アスナの後ろからエギルが近づく

「2人とも見事な剣技だった。Congratulation・・・この勝利はアンタ等ものだ」

予想外の事を言われて戸惑っていたら他の参加者からも賞賛の声が上がった

それを聞いて思わず顔がゆるんでしまった。

## 第6話

キリトが第1層のボスを倒した直後からです。

Side キリト

みんながボス撃破により喜んでしていると集団のさらに後方にいるキバオウさんが叫んだ

「なんでや!!」

その声により全員がソチラに顔を向けたそしてもう一度キバオウが声をあげる

「なんで、なんでディアベルはんに教えなかったんや!!」

「教えなかった?」

俺は思わず、言葉に出してしまった

「そつやろつが!!自分はボスの使う技、知つといたやないか!!」

最初っから、あの情報を伝えとつたらディアベルはんなこんな事にならなかつたんや!!

もしあの後すぐユウキはんが助けなかつたらディアベルハンは死んでいたかもしれないんやぞ!?!」

その声が響くと、この場がざわめき始めた。

そしてキバオウと一緒にPTの奴が声を上げた



「きつとアイツ等、元 テスターだ!!だからボスの攻撃パターンも全部知っていたんだ!

知ってて隠してたんだ!!他にもいるんだろ、元 テスター共・・・出て来いよ」

そういつと集団が一斉に辺りに目を配らせた

まずい、このままじゃ・・・

そう思いながらオレは、どうやってこの雰囲気をも元に戻すか考えていた

少しして、ある方法が閃いた・・・だが、危険もともなう行為だ

思わず、ゴクリと喉を鳴らす。

その間にエギル、ユウキ、アスナがキバオウ達に向かい、口論していた。

「ちょっとキバオウさん・・・」

「ちょっと・・・」

オレは覚悟を決め、口を開けた。

「クク・・・アハハハッハ!!」

自分でも変だと思いつつ笑い声をあげた

エギル、アスナ、ユウキが疑問に思い、こちらを見る

「元 テスターだと？オレをあんな素人連中と一緒にしないでもらいたいな」

「な・なんやと!？」

「SAOの テストに当選した1000人のうち・・・レベリングのやり方も知らない奴がほとんどだった。

オレはあんな奴等とは違う」

そう言いながらディアベルを抱えているキバオウに近づいていった。

「オレは テスト中に、誰も到達できなかった層まで到達した、ボスの刀スキルを知っていたのは

ずっと上にいるモンスターと散々戦ったからだ！、他にもいろいろ知ってるぞ、情報やら何やら問題に

ならないくらいにな。」

「な……なんや、それ……そんなん、ベータテスターどころじゃないやんか！

もう、チートや、チーターやろ、そんなん!？」

そのキバオウの言葉を始めとして、集団の方からも声が上がった。

「そうだそうだ!？」

「チーターだ!!」

「ベータでチーター! だからベーターだ!!」

なるほど… はアルファベットのB…Bとチーターを合わせて、  
ビーターか…

子供みてえなアレだが、なかなかだ……

「ビーター…いい呼び名だなあ、それ」

「なっ！」

オレがそう言つと、キバオウがアゴをガクンと落とした。

「そう…オレはビーターだ。これからは、元 テスターごときと  
一緒にしないでもらおうか…」

そう言いながら、オレはメインメニューを操作するとラストアタック  
ボーナスで手に入った

【ソード・オブ・ミッドナイト】を装備した。

言つのもなんだけど完璧悪役だな…オレ

「お前等はそこで寝ている役立たずのナイト様の元 テスターと一緒に  
楽しくしているよ」

そういうとみんなが驚く

「そんなん嘘や、ディアベルはんが テスターなんていい加減なこと  
いうなや!!」

キバオウがそうオレに言つとディアベルが声を上げた

「彼の言っている事は本当だ、オレは元 テスターだずっとお前等の  
事を騙していたんだ、だがオレは

はじまりの町で待っている人達にこのゲームはクリアできないわ

けじゃないことを伝えたかったんだ、みんな  
本当にすまない」

そういつとディアベルは頭を下げる。その直後今まで一緒に組んでいたPTメンバーが言った

「リーダー？そんな事ぐらいで俺達が見放すとも思っていたのか？  
リーダーのおかげでボスも倒せたんだ

元 テスターがどうしたそれぐらい別にどうでもいいさ、俺達の  
リーダーは強くて正義感が高いナイト様  
なんだぜ!？」

そういいながら他のメンバーもディアベルに感謝しているとか他にもいろいろ言った

「本当に許してくれるのか？こんなオレをずっと嘘をついていたんだぞ？そんな奴をお前等

は許すのか？」

「俺達のリーダーはあんた一人だ、関係ねーよこれから一緒に頑張るっぜっ」

そういつとディアベルが泣いていた

オレはもう元に居たところには入れないんだ  
もう一度息を吸って

「勝手にやっている、雑魚共がオレは一人で誰も行けない所まで行ってやるじゃーなナイトさん」

そういつとオレは次の層の扉に行くがアスナに声をかけられた

「ちょっと待って」

「何だ？」

「あなたなんで私の名前知っていたの？」

オレは苦笑いをしながら答える

「ここらへんにHPがあるだろ？その下に小さく名前が書いてないか？」

アスナはこちらを睨んで言う

「き・・・キリト？これがあなたの名前なの？」

「ああ、そうだ」

そついつとオレはPTを解散した

「ねーあなたはずっとソロでやるの？」

「オレはビーターだからな、君は強くなる信頼できる人からギルドに誘われたら断るなよ？」

オレはそれだけと言って次の層へ行こうとすると、話しかけられた

「こちらの世界では初めまして和人さん」

「ああ、ウキか、今まで言わないでくれてありがとうがとつな、それからオレ

「はキリトだ」

「ずっとソロで行く気ですか？僕達と一緒に行きませんか？」

「それはできないな、すまない。それからクリアするまで絶対死ぬなよ？直葉が悲しむからな」

「もちろんですよ、まだ一緒にいろんな事をしたいですしね。そちらも死なないでくださいね」

そうユウキが言うとオレは次の層への扉を開けた

## 第7話

S i d e    ユウキ

第1層クリアから十日後には第2層のフロアボスのもクリアし、さらに2ヶ月後には第10層まで攻略を完了していた。僕はというとこの間もいろいろな事をしていました。

まず第1層をクリアした後すぐに第2層の攻略会議が始まったのですが、ディアベルさんが

僕を責任者にしてくれた事、それから第10層まで僕がフロアボスの攻略隊長になっていました。

自分の容姿のせいで最初は罵倒や不満を言う人間も多かったのですが、ディアベルさんや今の時点の前線の人達がカバーをしてくれたおかげで僕の実力がかなりの人達に伝わっていました。

そして第10層クリアボーナスがギルド作成解禁になったわけですから、それを知った僕達は

1層からずっとボスでPTを組んでくれた人達と協力をしてギルド作成の10万コルを貯めて

聖竜連合    というギルドを作成した。僕が隊長という事もあってかなりの入隊希望者がいたが

10層の時点での厳しい入隊試験を行い、今は13名で活動していた。

ちなみにエギルさんは第10層で道具屋を営業していた。前から  
したかったらしく

お金を節約してついに最近購入していた。

そんなこともありながらさらに数ヶ月経つと20層までクリアし  
ていた。

そして20層クリアから4日後、アルゴさんから仕入れた片手剣を  
使うと出てくるという刀スキルが出たのだ。

「よっしやあああああ、やっと出たあああああ〜!!」

僕がそう叫ぶとギルドメンバーが話しかけてきた。

ギルドメンバーと言っても第1層からの付き合いでみんなは僕の  
ことをユウキではなくユウと呼んでいる。三文字だと戦闘中、言い  
にくいからそうです。

「おいおい、ユウそんなに喜ばなくてもいいだろ?」

そういつとディアベルさんは笑っていた。

「ユウは自分の事となるとリアクションがいちいち大袈裟になるんで  
すよ」

そう彼女が笑いながら言うと他のメンバーまで僕を見ながら笑っ  
ていた。

彼女はディアベルさんのリアルの彼女であり今は高レベルのプレ  
イヤーで容姿も



黒髪ツインテールの整った顔でとても大人の女性のような雰囲気を出している、通称リンさん

「りんさんつるさいなあ、僕は刀が好きなんだよ」

僕がムツとした顔で言うともみんなが同じ事を言ってきた。

「」「」「」「」「この後すぐ武具屋に行こうって言い出すんだろ？」「」「」

見事にハモルみんなさん、どうやら僕は考えてることが顔に非常に  
出やすい

そうです。だってこの日の為にレアな鉱石もゲットして強化する  
気満々だったんだもん

「それじゃーみんなの装備の強化も兼ねて15層にあるリズベット武  
具店に行きましようか」

今のSAOなかでは現在リズベットさんが一番武器作成スキルが  
高いそうですが、最近店を

始めたのであまり知られていない武具屋である。

そして僕等はエギルさん経由の格安の転移結晶を使って5層した  
の15層へと移動した。

転移してみるとかなりの人が15層にはいた。攻略組みはあまり  
下の階層まで来ないことはこの時点で

あまり降りてこないことが周知である。他のプレイヤー達が僕等

を見て話をし始める

プレ1「おい、あれ聖竜連合のやつらじゃないか」

プレ2「本当だ、しかもあの小さい鎧を着た奴、隊長じゃなかったか？」

10層クリアしたあたりから女の人が僕に話しかけてくるなんて珍しくなく

最近ではストーカー紛いの人まで出てきている。

僕達を見ているプレイヤー達はそんな事を話しながらこちらを見ているがそんなのは無視して15層の広場の裏にあるリズベット武器店を目指す、そして店に入ると元気な声で

「いらっしやいませ、リズベット武器店へ」

そいつと僕達のことを見て驚いていた。それもそうだ今では僕達は最前線の有名所のギルドなのだから

他にも3名ほど店内にいた

「っお、ユウキじゃねーか、今日は攻略じゃないのか？」

そいつと僕達はあいさつをする

「ごんには、クラインさん今日はついに刀スキルができたんでついでにギルメンの装備を強化するのと刀を作ってもらおうと来たんですよ」

この趣味の悪い赤いバンダナを付けている人はクラインさんと言ってキリトさんの数少ないフレンドでもあり、前線のギルド「風林火山」のギル長をしている。

クラインさんとはボス戦の会議で何回もあって刀についていろいろ語って仲良くなった。

「まじかよいいな、オレは後少しってとこかな用事も済んだし俺等は行くわ」

そういつとクラインさんと2人は店を出ていった。

そんなやりとりをし終えてからリスさんに話しかけた

「会つのは初めまして、リズベットさん 聖竜連合 で隊長をさせてもらっているユウキです」

僕はそういつと手を差し出す。見た目に合わない言動に驚いてリスさんは慌てて握手をする

「は・・・初めましてリズベットと言います、防具の件ではお世話になりました」

防具の件とはこの店の初の営業日にギルドの統一防具を全員分頼んだという話だ。

「ええ、その件ではお世話になりました。今日は仲間の防具と僕の武器の強化をお願いしに

来たのですが大丈夫ですか？」

そう僕が言つとリスさんは慌てて言い返した。

「ええ、この時間だったら大丈夫ですよ、防具は明日までに仕上げるので」

武器の方を魅してもらってもいいですか？」

そう言われたのでウインドウを操作して第10層でのLAボーナスでゲットした物と強化用のレア鉱石を出して渡した、

「それじゃー、少し待っていてください」

そう彼女は言うとかウンターの裏にある工房に行った、そして5分後戻ってきて

オレの前に一本の刀を渡す。

「ええと、刀の名前はPurple swordとなっていますが、使った鉱石がスピードタイプなので軽いですがいいですか？」

彼女は心配な顔で聞いてきた

「うん、心配ないよ、名前はシンプルだけどいい剣だ!!」

貰ってから何回か素振りをしているが速過ぎて太刀筋が見えないとリズは思った

「それじゃー鎧の件とこの剣のお金は払っておくよ」

お金を出してそれを受け取るリズさん、そして僕達6人は鎧を解除して渡す。

あれ？なんだろリズさんが僕の方を見ているんですけど？

そう思っていたら僕の顔を見ながら小声でかわいい・・・と言うリズ

さん

「そこは、かつこいいって言ってもらいたんだけどね」

と僕が声をあげるとリズさんが顔を赤めていたがそんな様子を見ていたギルメンは笑いながら

「まあ、ユウは見た目が幼いからしょうがないかな・・・」

「隊長は中身がかなり親父臭いんですけどね」

とリンさんとディアベルさんが笑いながら言った。

「そこは大人って言うてくださいよ」

苦笑いしながら言って、みんなでご飯を食べにNPCが経営しているレストランに行った。

## 第8話

これは本当になつかしい昔の事だ

僕の両親は僕が生まれて7歳の時に病気で死んだ、僕を引き取ろうと僕の家に来たエギルさんに僕は言った。

この家から離れたら両親の事を忘れてしまっから、一人でいいからここにいさせてほしいと。この

時の事はオレも覚えてる。それからの僕は学校でもどこにいても誰も近づくさせない雰囲気を漂わせていて

誰も僕に話かけてこなかった、直葉以外はそんな僕に対しても直葉は毎日会いに来てくれた、僕はいつの日か

直葉に聞いた、なんで僕なんかの為に会いに来てくれるんだ？直葉は笑いながら僕に抱きついて言った

「大好きな人が傷ついてるのに、何もしないなんてできないじゃん」

それから直葉と一緒にいて徐々に両親が死んだという事を受け止めることができた。

それからは直葉と一緒に居るために同じ剣道所に通った。僕は気がついた僕は直葉がいなければ生きて行けないと

これが僕の過去・・・

二二四年十一月某日

side ヨウキ

あのデスゲームが始まって2年がたった

今現在、生存者は6000人、全100層の内73層までエリアが攻略され、引き続き74層の迷宮の

攻略が行われているそれが今現在のアインクラッドの現状。

あれからもうすでに2年が経って73層までクリアしていた、本当に長かった……

そう思っていたら懐かしい所にいた。それは僕の家だと思っていたらチャイムが鳴った。

僕は玄関に行き扉をあけると本当に懐かしい人がそこにいた僕の「恋人」

そう桐ヶ谷 直葉がそこにいたのだ、僕は気がついたこれは夢だ……と

直葉はこっちをみながら僕が昔、風邪で寝込んだ時に看病しに来てくれた時と同じ顔で言った。

「……………」

何だつて？聞こえないよ、僕はそう思いながら直葉を掴もうとする  
となぜか

距離が空き、周りの景色もガラスの様に壊れて崩れていく。夢が終  
わるのかと僕は思っていたが

夢でも……会いたい人と長く一緒にいたい、そんな気持ちに僕は  
襲われた。

「行かないでくれ!!直葉!!」

僕が叫ぶと直葉は悲しそうな顔で叫んでいる

「……………」

よく見ると直葉が泣きながら叫んでいた。

「待ってるから」

夢から覚めたら僕は泣いていた、僕は小さく声をあげた

「待ってる……から……か」

そつだ早くこのふざけたゲームを終わらせて、僕は会いたいんだ。

僕は直葉に会いたいんだ……そう思いつつギルメンを起こしに部  
屋から出る。

それから数日後、七十四層のボスがキリトさんとアスナさんやクラ



インさんによって

倒されたという話でアインクラッド中で話題になった。

七十四層のボスが倒されお祭り騒ぎになって僕とディアベルさんとリンさんで話しながら

「ご飯を食べていると、聖竜連合の新人の人が来て

黒の剣士と騎士団長様が戦うと言ってきた、それを聞いて僕達はロシアムに行く」と

入り口の辺りで血盟騎士団の服がこれ程に似合わない太った男が入場チケットを売っていた

僕達はチケットを買ってロシアムに入ろうとしたらエギルさんが食べ物や飲み物を売っていて

それを買ってから闘技場の観客席に座る、決闘が始まる前から大盛況で辺りからは歓声が聞こえてくる

そして待つこと5分してから黒の剣士ことキリト、反対側からは血盟騎士団の団長、ヒースクリフが入場する

2人は何やら言葉を交わしている、しばらく言葉を交わすと一定の距離まで離れてから

ヒースクリフがウィンドウ表示すると初撃決着モードで決闘を申し込み、キリトはすぐにそれを受諾する、

キリトは背中から白の剣と黒の剣を取り出す、ヒースクリフは十字盾の後ろから細身の長剣を抜く。

そしてDUELの文字が出たのと同時に2人は動き出し激しい交戦をくり広げている

しばらくして両者共に剣や盾で攻撃を防いでいるが少しずつHPが減っていくルール上では

どちらかのHPが半分を切ると負けになってしまう

HPが半分を切ろうとした時キリトが叫びながらソードスキルを発動するそれは上位系のソードスキルだと分かる

その攻撃がヒースクリフに叩き込むとそれを利用し盾で跳ね返し大技のソードスキルを使ったおかげで

キリトは動けないでいた、そこにヒースクリフの長剣を叩きこまれ決着した。

その意外な決着により観客が大いに盛り上がったのは言うまでも無い。

その後キリトさんがPKに殺されかけたり、アスナさんと結婚したりとかその後すぐバレて二週間で前線に帰ってきたり

いろいろな事が起きていました。ちなみにディアベルさんとリンさんも結婚しましたが

聖竜連合のメンバー全員の前でプロポーズしていた時は驚きました。

そして今日、第七十五層ボス攻略が始まる。今回僕達はいつものメンバーで防御型の装備で

装備を固めボスに挑んだ

## 訂正等

作者「こんにちはみなさん古塩です。今回この回を作ったのは今後の事について作者なりの考えを示そうと思ったからです。」

ユウキ「それでどんな事を言うんですか？」

作者「まず、主人公の薄さと、話の浅さについてです。作者はとりあえず、SAOの事件をさっさと終わらせてフェアリ・ダンスで普通ならキリトと

リーファーが主体の話なのですがそこに主人公を入れて話を盛り上げる

つもりで書いていました。」

ユウキ「感想を書いてくれた人が主人公の話を作らないのかと書いてたよ？」

作者「その点については作者は、長めに書いてみるつもりですがもちろんオリジナルなので登場人物等の細かいことを決めないと話が

作れないのでかなり時間がかかると思います。」

ユウキ「考えは分かるけど、作者は他にも言いたいことがあるんだろ？」

作者「初めて小説自体を書いてみて、とても面白かったしもっとSAOの

中での事を主体にした小説を書いてみたいと思っています。

それについては今考え中ですが、この小説みたいにSAOの中ではキリトと

第3者的位置の物ではなく、一緒に行動する小説を書くつもりです。

ちなみにヒロインもオリにするか小説に出てくるのしよつか迷っています」

ユウキ「とりあえずは言うことは終わったみたいだし僕からも一言」

作者「何か言うことでもあるのか？」

ユウキ「このサイトの説明を読んでいるいろいろ見ていたらお気に入り件数が

50件を超えていた事に昨日気がつきました。本当にありがとうございます」

作者「それじゃー最後に一言俺からも言わせてくれ」

ユウキ「まだ言うことあったんですか？」

作者「夏休みの宿題まだしてないんだよ!!!」

作者&ユウキ「。(。.(。!!」

そついつわけで更新とか遅れますがご了承ください。